
紅月の果てに

A r m a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅月の果てに

【Nコード】

N2568J

【作者名】

Arma

【あらすじ】

ラ・ヴァリエール公爵家にひっそり囁かれる忌み子の噂。とある様々な要因を抱え、そう囁かれ続ける彼女はある日 以前書いていたゼロ魔二次創作に納得いかず、容姿設定そのままにありとあらゆる設定を変えて改めて贈るゼロ魔二次創作！ Ar
c a d i a 様にも投稿させて頂いております

プロローグ（前書き）

この小説にはオリジナル設定の他、転生、TS要素が含まれております。また、独自解釈、原作とは全く異なる展開になる場合がございます。それを踏まえた上でお読みになり、お楽しみ下さいませ

プロローグ

それは、引退をかけた盗みだった。

また一つ、大きな盗みを果たしてその帰りに寄った酒場での事。
ヴァリエール公爵家には国宝級以上の宝がある、という噂を聞き付けたのだ。一体どんなものなのかがはっきりしない噂話の域を出ない戯れ言であり、最初の内は全く興味を持たなかった彼だったが、次の言葉を聞いて嫌でも耳を向けざるを得なかった。

土くれがその宝を目にした、と。

土くれと言えば最近噂になっている凄腕の盗賊だ。土のトライアングルであるかの者はその技術力の高さ故に、盗みに入れない場所などないと聞く。

そんな土くれがあらう事かヴァリエール家に盗みを働き、見事その宝の場所に辿り着いたという。

それを聞いた彼は、一気にその国宝級以上の宝とやらに興味を抱いた。

話を聞く限り、土くれはその宝を盗み出せなかったようだがこれも彼の興味を惹く切っ掛けとなっただろう。そしてそれを聞いた彼はこれはチャンスだと無意識に浮かべていた笑みを更に深める。

彼は風のトライアングルだ。一部にはスクウェアなのではないのかとも言われている。恐らくだが土くれと同時期に盗賊家業を始めた彼は、あらゆる場所にそれこそ風の如く入り込んで盗みを働いた凄腕の盗賊ではあるものの、一体何が原因なのか一歩土くれに届かずにはいた。いつしか会った事さえないその土くれをライバル視するようになり、一時期は王宮に盗みを働くなどという暴挙を凶ったこ

とすらある。

技術力では恐らく土くれより上の彼ではあったが、それでも土く
れの名声に隠れている事にいい加減疲れ始めた頃の噂話だ。ここで
土くれが失敗した盗みを自分が成功させれば、あつという間に土く
れを追い抜けるだろう、と食いつくのも自然な話だ。

王宮にも盗みに入ったのだ、公爵家ぐらいなら楽に入れるという
自信と楽観が生まれてしまったからかもしれない。彼はその噂話を
聞いて数日後にヴァリエール家に盗みに入っていた。

「クソツ……やはり、時を置けばよかったか」

真夜中の時間帯。定番の時間ではあるが、人々の注意力がやや緩
慢になる絶妙な時間帯に彼はヴァリエール家の邸に忍び込んでいた。
今のところは見つかってはいない彼ではあるが、つい最近土くれ
に盗みに入られたという事で強化された警備は彼の腕を持ってして
も厳しいものだった。それでも警備を潜り抜ける彼は確かに凄腕の
盗賊メイジだろう。そして、彼がここまでその宝を求めたのは今回
が盗賊生命の全てを掛けた盗みだからだ。

この盗みが失敗したら、盗みは止める。どう足掻いてもライバル
に勝てないなら、素直に諦めてしまおうと考えたのだ。やむを得な
い事情で盗賊業に手を出す他の者達と違い、ただ力を誇示したかつ
たから盗賊となった彼だからこそその考えなのだろう。

やがて、誰にも見つかる事なく辿り着いた一つの扉の前で、彼は
一息吐いた。しかし、すぐに異常に気がついて気を引き締めた。

そこは、ヴァリエールの邸の最奥。宝があると噂されているであ
ろうその部屋に、警備はなかった。

正確に言えば、警備だった者が床に倒れ伏していたのだ。

もしま、またもや土くれが盗みに入ったのか。そう思い、畏ではないかを確認してから気絶している警備に近づいたが、その警備の姿を見て彼はその考えを消した。

警備の者達は、乱暴に気を刈り取られたのか所々顔面が腫れていた。まるで喧嘩の末のような様子に、あの土くれがこのような下手を打つ訳がないと考えたのだ。そして、彼のその考えは正しかった。

彼は警備の者から扉に目を向ける。これが他に盗みに入った者の仕業ならと考え、部屋に注意を向けたのだ。

彼は風のメイジだ。風のメイジは気配や聴覚に鋭い者が多く、彼もその例に漏れない。果たして、その扉の奥に一つの気配を感じたのだが

(これは……歌?)

扉越しに微かに聞こえて来た鼻歌に、彼は眉を潜める。それが若い女の声であることも、彼が怪訝に思った要因の一つだ。

彼は一応扉にディテクトマジックを使い罫がないか確かめ、何時でも魔法を使えるように杖を握ると、一気に扉を開いて中に飛び込んだ。

そして、杖を構えて目に飛び込んだそれに驚愕し彼の時間は一時的に停止する。

彼が目にしたのは、貴族には在り来たりな普通の部屋だった。それはここに宝などないという事を悟るのに十分ではあるが彼が驚いたのはそんなものではない。

少女だ。見たこともない容姿の少女が、そこにいたのだ。

その少女は彼に背中を向けており、ランプも点けていない薄暗い部屋の中、窓から注がれる月明かりを浴びるように、鼻歌を歌っている。

静かな部屋に響く少女の歌声。彼が入っている事に気づいているのか、それとも無視しているのか、少女は彼の目の前でどこか悲しい響きのある歌を口ずさんでいた。

それが、何故かこの世の者とは思えない光景に見え見惚れていた彼であったが、その少女の足元に気絶していた警備と同じ服装をした男が倒れているのを見て、我を取り戻した。

そして、丁度その時に少女の歌声がピタリと止んだ。薄暗い部屋を静粛が支配し、緊張感が張りつめる。

そして、やや間を置いてその少女は彼に振り返った。

「　　」

くるくると柔らかかそうに巻いた白銀色に輝く長い白髪。幼さが目立つが、綺麗すぎるぐらい整った顔立ちに宝石のような紅い瞳。小さな子供のように低い身長割り、出るところは出ている成熟した女のようなプロポーション。不思議な事に何も身に付けていなかったが、隠そうともしないその裸体がその少女を神秘的にあやどっていた。

10人が10人共に美少女と言ってもおかしくない美しすぎる少女。言い表しがたい雰囲気呑まれ、一瞬尻込みした彼だがその少女の足元に倒れている扉の前で気絶していた警備と同じ服装をした男を見て、警戒するように少女に杖を向けた。

「あら、この前のお姉さんじゃないね」

少女は彼を見て首を傾げると、綺麗に澄んだ声でそう言った。そのどこか甘い声色に気を取られそうになる彼だったが、倒れている

警備の者を見て杖を握る手に力を込める。

その手は、いつの間にかじっとりと汗ばんでいた。

少女は彼の視線に気づいたのだろう。一度視線を落として再び彼を見ると、詰まらなそうにその男の頭を踏んだ。何度も何度も踏みつけ、やがてそれが飽きたのか男から足を離す。すると、男の身体が宙に浮かび上がった。

彼はそれを見て目を見張った。少女は杖らしきものなど持っていないのだ。

一体何者なのか、そんな事が頭に浮かびそうになったとき、彼の視界が暗くなった。その一瞬後強かに顔面に何かがぶつかり、彼の意識はあっさりと刈り取られた。

油断していたのだろう。ともかく、彼の盗賊稼業の幕は呆気ない形で閉ざされたのだ。

「……………はあ」

少女 アンジェリカはため息を吐くと、ベッドから起き上がった。

「……………もう夜か」

どことなく元気がないのは、昨日邸に賊が入られた時に護衛に雇われていたはずの傭兵によって強姦未遂に遭ったからだ。とある事情により隔離され、給仕の間で特異な容姿故に忌み子などと噂されていたのが傭兵の耳に入ったのだらう。そのような事情で隔離されているなら、別に何をしても問題ないと浅はかな考えを持ち、そして返り討ちにされたと言ったところだ。丁度その時に、根も葉もない噂を聞いてやってきた盗賊に八つ当たり気味に気絶させた傭兵をぶち当てノックアウトさせたのが昨夜のおおよその顛末である。

どうやらあの傭兵達は、先日盗みに入った土くれのせいで雇われていた者たちらしい。土くれはともかく、最近流れているらしい根も葉もない宝の噂を聞き付けた盗賊に万が一入られた時の対策だったとアンジェリカの父親は言っていたが、アンジェリカの話の聞いたかの父親は鬱陶しい程彼女に泣いて詫び、もう傭兵は雇わないと誓ったそう。

昨夜の騒動を思い返し、憂鬱そうにため息を吐いたアンジェリカはそこでドアを叩く音を聞き扉に目を向ける。

「どうぞ」

「失礼します」

そう言っただけもなくドアが開き、メイド長が夕食を載せたカートを押して部屋に入る。メイド長はカートを部屋の中ごろまで押すとそこにカートを止めて部屋を出ていった。本来なら、メイド長が準備をするのだがアンジェリカが止めるように言っているのだ。最初は自分の勤めだと下がらなかったものの、自分は忌み子だから必要ないと告げるとなぜか泣かれ、その翌日から言い付け通り準備をしなくなった。

アンジェリカはしばらくそのカートを感慨深そうに見つめた後に、腰掛けたベッドから『見えない腕』を伸ばしてカートの上にある夕

食を自分の手元に運ぶ。

その『見えない腕』こそが、彼女が邸の奥に隔離される切っ掛けとなつてゐる。他にも忌み子と囁かれる要素はあるがこの見えない腕が一番の原因と言つていいだろう。

アンジェリカも最初は他にいる三人の姉達同様に愛情を注がれ普通に過ごしてきた。他の姉達と髪や瞳の色が全く違う為良くない噂が立つ事はあつたものの、それ以外は公爵家という身分の高い家庭故か不自由なく過ごせていた。

だが、ある日の事だ。まだ4歳かそこらの頃、アンジェリカが双子の姉であるルイズに邸の外へと連れ出された時だ。森に入つてしまい、道を外れてしまったところでオーク鬼の群れに出会したのだ。それより前から自分にだけしか使えない『見えない腕』を自覚していたアンジェリカは、当然それを使つて姉を助けたのだが、そのやり方が些か不味かつた。流石の彼女も『見えない腕』を全て把握しておらず、がむしゃらにそれを振つたその結果オーク鬼達の惨殺現場を築き上げてしまったのだ。

自分の『見えない腕』の特異さを理解して、それまでそれを隠していたアンジェリカだが姉のルイズにその時の様子を母親たちに報告され、結果家族にはアンジェリカの能力を知られる事となつた。

だが、家族の反応はアンジェリカが予想していた最悪の反応ではなく、とても暖かな反応であつた。惨殺シーンを見てしまった双子の姉であるルイズには恐れられ、『絶対に、見知らぬ人の前で使うのではありませんよ』とキツく母親に言われたものの、後は身を案じて強く抱きしめられとアンジェリカにとってこの上なく幸せな時であつた。

だが、いくら家族の反応が良くても周りはそうは思わなかつた。どこからアンジェリカの『見えない腕』の事が広まつたのか、領民の間でアンジェリカの悪い噂が飛び交うようになった。それ以前に彼女の知識方面での異常な発達や特異な容姿で良くない噂が立っていたのだ。何時しかその噂を元に忌み子だと囁かれるのも通りだろ

う。もう少し年を取っていけば、メイジとして杖を持つことができ、天才だとそのような方面でアンジェリカは知られていただろう。こればかりは時期が悪く、どうする事も出来ずにいた。

それを嘆いた父親が取った策が、アンジェリカの一時的な隔離である。それは悪い噂を聞いて傷心した彼女を匿うという事であった。

そしてアンジェリカは、他の誰よりも早く杖を扱うようになり、その聡明さ故にオーク鬼を魔法で撃退した。その時の戦闘で生まれつき煩っていた病を悪化させてしまった。という噂を流した。

果たして、それは父親の思惑通りアンジェリカの悪い噂を払拭させることができた。今も時折忌み子だと囁かれるのは、噂好きな給仕たちの間でふざけて交わされる戯れ言なのだ。

しかし、すっかり人間不信に陥ってしまっていたアンジェリカはそれから部屋を出る事はなく一時期はその『見えない腕』で近づく人たちを片っ端から殴り飛ばしていたぐらいだ。今は落ち着きを見せ、すっかり元の可愛らしい性格に戻ったものの深層心理に刻まれた恐怖は払拭できていないのか、ほとぼりが冷めた今でも未だに部屋から出られずにいた。

「……はふ。だめだ、ちよー鬱になってるし」

昨夜の強姦未遂が響いているのだろう。食事の最中久々に今までの生い立ちを振り返っていたアンジェリカは、そんな憂鬱な気分を振り払うべく最後にスープを掻き込んで『見えない腕』を使って力一トに食器を戻した。

ちなみにこの『見えない腕』は長さがおよそ3メートルあり、最大六本も出せる。本数、長さを調節できる事はおろか、物を掴んだり殴ったり盾にできたり、果てには任意で物をすり抜けたりと自由自在で超便利なのだ。自分にだけ感覚的にその腕が見えるというのも最大の利点だ。皮肉だが、忌み子と囁かれるだけの事はあるだろう。

その『見えない腕』を意味もなく展開させ、目の前でうねうねや
つて「しよくしゅ〜」などとやや危ない発言をしたアンジェリカは、
何か面白い事でも思い付いたのか合いの手を打った。
そして何を思ったのかベッドからジャンプして

「え？」

突然目の前に現れた巨大な鏡に警戒心を持つ間もなく吸い込まれ
て行った。

第一話「少女、召喚」

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは緊張した面持ちでいつもより早い朝を迎えていた。

それは彼女と同じくして魔法学院に在籍している生徒達も同様だろう。何せ、二年への進級をかけた『使い魔召喚の儀式』が今日あるのだ。

しかし、緊張の度合いで言えば彼女は生徒の中で一番緊張しているのかもしれない。それはつまり、進級出来ないかもしれないと彼女が考えているからだ。

進級できない　それは、使い魔召喚の儀式の要である魔法『サモン・サーヴァント』の失敗を意味し、同時に落第生活の始まりである。ちゃんとした手順で、完璧に呪文を唱えたとしてもその結果がほぼ全て『爆発』となってしまうルイズはそれを恐れ、そして緊張のあまり周囲に何とも言えないプレッシャーをかけつづけている訳である。それは普段浮いている彼女を更に孤立させる要因となり、今日ばかりは仇敵（彼女からして見れば）もあまり近付けないようだった。例え誰かが話し掛けてきても無視をするか睨み付けるか集中しているからと言って追い返すつもりであるし、実際ルイズはそうやって一人になっていた。

「……………ふん」

ピリピリとしたオーラを午前中ずっと発し、そしていよいよ使い魔召喚の時がやってくる。

不機嫌そうに息を吐いた彼女は、偶々近くにいた誰かを図らずも怯えさせたが自分の番がやってきた彼女はそれに構わず杖を片手に前に躍り出る。何やら周囲が異様に騒がしいが、直前の精神統一とそれに伴い限り無く高まった集中力は、彼女の意識からありとあら

ゆる障害を排除していた。

視覚に映り込むものも瞼を閉じる事で意識から追い出し、更に集中力を高めルイズは自分だけの世界にのめり込む。何も見えず、何も聞こえず、ただ一つの目的にのみ集中する彼女はふと脳裏に浮かんだ『ゼロ』という二つ名に眉を潜める。

努力も、意気込みも他の生徒の上を行く自信はあるし自負もある。だが、それでも結果が出ないから『ゼロ』と嘲笑され

「……………っ」

ふと脳裏にとあるものを思い浮かべたルイズは、唇をきゅっと強く結び、カッと目を見開いた。あまりの迫力に何やら騒いでいた生徒達が黙り、近くにいた教師が冷や汗と共に一歩後退る。

絶対に成功させる。そんな強い想いを胸に、高々と呪文を唱えたルイズは力強く杖を振った。

「また失敗か？……………!？」

「……………いや、失敗じゃないぞ！」

その直後爆発が起こり、生徒達の悲鳴等が広場上がったが、ルイズはもうもうと立ち込める土煙の中で魔法の成功を確信していた。事実、土煙の奥には爛々と光輝く巨大な鏡　召喚門がうつすらと見えている。

ルイズは『サモン・サーヴァント』の成功に力を抜きそうになったが、まだ完全に成功した訳ではないので緩みそうになる頬を引き締めた。

そして、召喚門が一瞬強く輝きその向こう側にいる己の使い魔が門を潜ってきたのを確認し

「……………へ？」

どこから吹いてきた風によって土煙が晴れた瞬間、へんてこりんな声を上げた。

「……次、あなたの番」

時は少し遡り、使い魔召喚の儀式の中頃。

微熱のキュルケことキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーは、親友のタバサにそう声をかけられうつすらと笑みを浮かべた。

「ようやく私の出番ね」

待ってましたと言わんばかりのその自信満々なキュルケの言葉に、タバサは短く応援の言葉を贈る。キュルケは返事代わりにタバサの頭を撫でると、ふと思いついたように周囲に目を向けた。

「タバサ、あなたの使い魔は？」

先ほどは確かタバサの番だったはず。確認の意も込めてそう聞くと、タバサは徐に杖を空に向かって指した。

「わぁお。流石はタバサね」

その先を追って空を見上げてみれば、そこには悠々と空を飛ぶ一匹の竜の姿が合った。

タバサが召喚したのは、見た目感じ幼生ではあったものの立派な風竜であり、それは彼女のメイジとしての腕の高さを物語っていた。

「タバサが風竜なら、私は火竜かサラマンダーと言ったところかしら？」

キュルケの称賛言葉に頬を赤らめていたタバサは、じっとキュルケを見上げて言う。

「きつと。あなたなら素晴らしい使い魔を召喚する」

キュルケはタバサの言葉に嬉しそうに笑うと、軽く頭を叩いて広場の中心へと歩み出た。そして、周囲から注がれる視線に臆することなく、美しく不敵な笑みと共に『サモン・サーヴァント』の呪文を唱えて杖を振った。

完璧に成功したその魔法は、程なく虚空に召喚門である巨大な鏡を出現させ

「きゃあっ」

その奥から飛び出てきた何かがどさりと地面に勢いよく落下した。

可愛らしい少女の声と共に。

「…………え？ ……あれ？」

あまりの出来事に、キュルケは半場放心していた。キュルケに視線を向けていた他の生徒達も同様、全くの予想外に思考が追いついておらず、皆キュルケが召喚した『それ』を呆けた様子で見つめていた。

やがて『それ』はゆっくり地面から起き上がると、最初は不可解そうに、次に不思議そうに周囲を見渡した。

「あれ？ どう、こじ？」

『それ』が発した可愛らしいその声に、ようやく周囲の止まった時が氷解を始めたのかどよめきが起こり始める。それは次第にボリユームを上げ、終いには動物園なんじゃないかと思うぐらいの騒ぎになった。

「人間だ！ キュルケが、人間を召喚したぞ！」

生徒達がぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあ騒ぐ中、それまで放心していたキュルケもようやく我に返ったのか戸惑った様子で『それ』と教師を見やった。

「静かになさいッ！」

教師もようやく我に返ったのか、騒ぐ生徒達を一喝すると身に付

けていたマントを外して『それ』に駆け寄った。

『それ』は誰かが叫んだ通り人間だった。見よう見聞違いのない人間。

ふわふわくるくるの綺麗で長い白銀色の髪。幼くも綺麗すぎる程整った顔立ちに、宝石のような紅い瞳。そして、透き通るほど白い肌を持つその身体は、小さな身長割には目を奪われてしまいそうな豊満なプロポーションであった。

キュルケが召喚したのは、そんな完璧と言える程美しく、可愛らしい全裸の少女だった。

そう、全裸。一体どういう訳か、少し怯えた風にしかし興味津々と言った様子で周りを見回す少女は完全無欠に素っ裸だったのだ。

教師　　コルベールは身体を隠そうともしない無防備な少女にマントを渡す。彼の顔が赤くなっているのは当然であろう。

「き、君。早くこれを」

「え？ ……あ、はい。えと、ありがとうございます」

裸を見られる事に全く抵抗がないのか、少女は流されるままにそれを受け取り、簡単にマントを羽織った。チラチラとマントの隙間から太ももやら何やら見えて非常に際どい。体型が非常に整っているせいもあり、キュルケに召喚された少女は色んな意味で周囲の視線を集めてしまっていた。

「……ミス・ツェルプストー」

コルベールは、まだ赤い顔のままキュルケに声をかけた。キュルケはその一言で察すると、諦めたような自棄になったような表情でため息を吐いた。

「ま、人間でも召喚したものは召喚しちゃったしね」
「前例のない初めての事態ですが……規則は規則です」

キュルケは肩を竦めると、キヨロキヨロと辺りを見回す少女に近寄った。

少女もキュルケに気付いたのか、一度辺りを見回すのを止めてじつとこちらを見上げてきた。タバサよりほんの少しだけ高い程度のその少女は、こうして見つめていると保護欲というか母性本能を擽られる。

キュルケは、よく見ると微かに震えている少女に優しげな笑みを浮かべた。

「私はキュルケ。あなたは？」

「えと、アンジェリカ」

「そう。いい名前ね。 我が名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。五つの力を司るペインタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

突然目の前で『コントラクト・サーヴァント』の呪文を唱え始めた彼女を不思議に思ったのか、少女 アンジェリカが首を傾げてこちらを見上げているが、キュルケはアンジェリカにニコツと笑顔を浮かべて額に杖を当てた。

「？ ……んむっ」

そして、徐にアンジェリカの顎を持ち上げて口付けをする。

キュルケはムンムン色気を放つ所謂美女だ。そんな彼女と今しがた召喚された美少女がキスを交わすというのは、何だか背徳的な香りが漂っており教師であるコルベールを含めた生徒達は皆頬を赤ら

めてそれを見つめていた。なまじ、アンジェリカはキュルケと比べて非常に背が低く、まるで幼い女の子を拐かしているようで尚更イケない香りが漂っていた。

思考が追い付いていないのか、全く抵抗を見せないアンジェリカの唇を楽しむように軽く啄んだキュルケは、そつと唇を話してコルベールに終わった事を告げる。

「……………あぐつ！？」

目をぱちくりしていたアンジェリカに変化が起きたのはその一瞬後であり、アンジェリカは唐突に左手を押さえるとその場にしゃがみこんだ。

「ルーンが刻み込まれているだけです。すぐに収まります」

コルベールの言う通り、アンジェリカの変化はすぐに収まり彼女の左手には使い魔の証であるルーンが刻まれていた。

顔を赤く染めて息も絶え絶え、羽織ったマントは少しズレどことなく扇情的な光景にコルベールは思わずアンジェリカを凝視してしまっが、彼女の左手に刻まれたルーンを見るとおや？ と眉を上げた。

「ふむ……………珍しいルーンですな」

キュルケがぼんやりしているアンジェリカの身嗜みを整えて上げている中、コルベールはアンジェリカに刻まれたルーンをスケッチに書き写す。書き写した後はキュルケにアンジェリカを休ませられるところに連れて行くように命じ、次の生徒の名を呼んだ。

キュルケの手を借りてアンジェリカがまず連れて行かれた先は、

親友のタバサの元だった。

タバサはアンジェリカと手を引くキュルケを興味深そうに見やる。

「……意外」

「そうね。全く、こんな可愛らしい娘が召喚されるなんて思わなかったわ」

キュルケはぼーっと俯くアンジェリカを苦笑して見やると、彼女の顔を覗き込むように腰を屈めた。

「大丈夫？」

「……えっ？ あ、うん。その、びっくりして」

たつぷり数秒かけて漸くキュルケの言葉に反応したアンジェリカは、困った風に笑ってキュルケを見上げた。

突然召喚されたのにも関わらず落ち着いているアンジェリカにタバサは何らかの興味を持ったらしくじーっと彼女を見つめていた。

「そうね、紹介するわ。この子はタバサ、私の親友よ」

親友と呼ばれ何となくむず痒いのか、タバサは感情をあまり出さないその表情を若干恥ずかしそうにした。

「アンジェリカ。よろしくね」

アンジェリカはにっこり笑顔を作るとタバサに右手を差し出し握手を求める。タバサは素直にその握手に応じると、何かに気付いたのかアンジェリカの向こう側に視線を向けた。

何気なしにアンジェリカはその視線を追ってみたが、その先にある使い魔召喚の儀式で思いもよらないものでも見たのか目を見開い

て硬直した。まだ手を繋いでいたキュルケはその手越しにアンジェリカの様子に気がき彼女に声をかけたが、アンジェリカは全く反応を見せずにその儀式を凝視している。

キュルケもその視線を追ってそちらを見てみたが

「……………あら、ルイズまで人間を召喚してるじゃない」

桃色髪 of 少女が召喚した人間の少年と何やら揉めているのを見て微妙な表情を浮かべるだけだった。

タバサだけが、凍り付いたアンジェリカの表情を見て何か悟っているようだった。

第二話：主従関係

「ん……………っ!？」

もぞもぞと何かが動いた気配がして、アンジェリカは目を覚ました。そして、ぼんやり瞼を開いたところで誰かの寝顔が目飛び込み、一瞬硬直した後一気に脱力する。

「……………そう、だった」

彼女の脳裏を過つたのは、虚空に浮かぶ巨大な鏡。それはサモン・サーヴァントの召喚門であり、先日という因果かそれを潜って召喚された訳であるのだが……

「……………むう」

使い魔契約という事で抵抗する間もなく唇を奪われた事を思い出し、困ったようにほんのり頬を赤く染めた。何気にファーストキスであり、しかもそれが同性だという事なのだがキスの一つや二つ大したことないのか当ても今もアンジェリカは落ち着いていた。多数の人間に裸を見られても気にしていなかったのだから、当然なのかもしれない。だが、完全に恥じらいがないというわけではないように事実アンジェリカの顔は赤く染まっている。

アンジェリカはひとまず、自分を召喚した少女キュルケを起こしてしまわないようゆっくり起き上がると、ベッドから降りて伸びをした。

「……………っ、はふ」

そこでまだ自分が素っ裸であることに気付いたが、部屋に閉じ籠るようになってからほとんど服など着なかった彼女が今更それを気にする間でもなく、あくびをしながら暢気に昨日の事を振り返っていた。

昨日は確か、強姦未遂のショックが抜けきらず一日ぼんやりしていた筈。そして、その日の夕食の後に巨大な鏡に事故で飛び込んでキュルケという少女に召喚され、流されるままに使魔となった。周りの会話でおおよそそんな予測を立てたが、恐らくその予想は当たっている筈。実際、彼女の左手にはそれっぽい証が刻まれているし、事実それは使魔のルーンである。

そこまでの記憶は彼女にあるのだが、その後の記憶はどうにもぼんやりしていて思い出す事ができない。だがいつの間にか眠ってしまったという事だけはわかっており、そのまま目を覚まさず朝を迎えたと言ったところだろう。

アンジェリカは明るくなってきた窓の外に目を向けると、眩しそうに目を細めながら考える。

何だかんだで惰性のまま自分の部屋に籠り続けていたアンジェリカだが、ひっそり外に出たいと考えていた。思わぬ形で些細な願いが叶う事になってしまい何だか夢心地な気分ではあるが、よくよく考えてみるとんでもない事態なのではないのかとアンジェリカは小さく唸った。

とは言え、そうまともに考えるつもりもないのかすぐにその事を頭の外に放り出したアンジェリカは、自分を召喚した少女に身体を向けた。

自分が使魔という事なら、未だに眠っているキュルケは主人という事なのだろう。そう考え、にいつと口元を笑みの形に歪めるアンジェリカ。

「……………これぞ、ふぁんたじー」

わかる者にしかわからない言葉を呟いたアンジェリカは、すぐにそれっぽい表情となるとキュルケを起こすべくベッドに歩み寄る。

何て呼ぶべきだろう。キュルケ、おねーさん、お姉様、キュルキユル、それが使い魔定番のご主人様。

何だか楽しんでいるらしいアンジェリカは、無意識に伸ばしていた『見えない腕』を触手よろしくうねうねと視界の端で動かしていた。もしその腕が見えていて、なおかつ今のアンジェリカを見るものがいれば、少女の皮を被った何かがご馳走を前に舌なめずりしている……………とかなんとか思うだろう。

そんな、アンジェリカの何かを感じ取ったのかはたまた偶然なのか、丁度その時キュルケが目を覚ました。一瞬もの凄く残念そうな顔になったアンジェリカだが、すぐに気を取り直すと寝起きで思考が追いつかず目をぱちくりさせてこちらを見るキュルケに微笑んだ。

「ご主人様あ、おはようございます」

「……………ごしゅ　っ！？　あ、う、うん、おはよう」

キュルケは一瞬ひきつった笑みを浮かべたが、やがて思い出したかのように脱力して曖昧な笑みへと変えた。

目を覚まして見れば目の前に裸の少女がいて、しかも『ご主人様』だと言われて何事だと思わない訳がないだろう。実際、彼女の脳裏には一瞬自分がとてもイケない事をしてしまっているのかと思った。いや、端から見れば現在進行形でイケない事をしてしまっている。小さな可愛らしい女の子を裸にさせてご主人様と呼ばせているなんて危ない事をしているように見えるのだ。周りに知れたら、色々和不味い事になるだろう。

「あー、アンジェリカちゃん？　その、私の事はキュルケでいいか

ら、普通にして頂戴」

「そう……？ 使い魔って事だからそれっぽくしたけど……わかった、そうする」

そう言っつて残念そうにしてからにこーっつと笑顔になるアンジェリカ。見た目は大人しそうなもののだが、中身は案外そうでもないという事を今ので悟ったキュルケは複雑な表情を浮かべた。

そんなキュルケの心境を知ってか知らずか、ふと不思議そうにアンジェリカは首を傾げた。

「昨日召喚されてからの記憶が曖昧なんだけど、教えてくれない？」

問われたキュルケは簡単に昨日の事を伝えた。

昨日の使い魔召喚の儀式の最中、何かを強張った表情で見つめたまま何の反応を見せなかったアンジェリカをキュルケは何とかして部屋に連れ帰ったのだが、そこでもアンジェリカは全く反応を見せずにぼんやり虚空を見つめていたらしい。そして突然召喚された事によるシヨックなのだろうと思っつてアンジェリカを寝かせたという。アンジェリカもキュルケの話の聞いて思い出したのか、納得した風に頷くと途端に表情を曇らせた。先程とは全く違う雰囲気驚いたキュルケだが、何か訳があるのだろうと考えた彼女はまだ立っているアンジェリカを隣に腰掛けさせそつと肩を抱いてやった。それだけでも幾分か楽になつたらしく、アンジェリカは安心したようにキュルケに笑みを向けた。

「……ありがとう」

「いいのよ。元はと言えば、私が無理やり召喚しちゃったんだし」

あの時は確かルイズが召喚をしていた筈。何か関係があるのだろう、そう思っつてキュルケは次第に曇りが晴れていくアンジェリカを

見つめたが、それを聞いたりはしなかった。彼女の表情からして、あまりいい話ではないとわかったからだろう。

事実、アンジェリカはそのルイズと関係があった。しかし、アンジェリカはそれをキュルケに言うつもりなどなかったし、近いうちには知られるだろうと敢えて何も言わなかった。

「……さて、アンジェエ。あなたの服、どうしましょうか？」

何とも言えない空気を払ったのは、そう明るく声を上げたキュルケだ。信頼の意を込めて早速アンジェリカを愛称で呼び、魔法で洋服ダンスを開いて何着か服を取り出す。

一瞬きよとしたアンジェリカだが、ここが魔法学院であるらしい事を思い出すと納得したように目の前に浮かぶ何着かの服を見る。

「ローブとかってないの？」

「うん？ あるわよ？」

「んじゃ、それでいいよ」

「……まさか、それだけ着るつもりなの？」

さも当然と言った様子でこくりと頷くアンジェリカに、キュルケは呆れたようなため息を吐いた。と、同時に一体どんな生活をしてきたのだろう、と昨夜から抱いていた疑問を抱く。

「……ダメ？」

「だめよ。せっかく可愛いんだからちゃんと着飾らないと」

とは言え、着させられる服があまりないという事にキュルケは困った。

アンジェリカはスタイルがいい。胸なんかキュルケに負けず劣ら

ずであるが、その割りに身長が低い為どうしても服のサイズが合わないのだ。もつと身長が高ければ、キュルケの普段着の幾つかを貸すことができただろう。

「……というか、あなた不思議な体型してるわね」

親友のタバサと対して変わらない身長癖して自分でも羨むくらい豊富なプロポーション。一見アンバランスに見えて完璧にマッチしているという摩訶不思議。黄金率とはこういう事なのだろうとキュルケは全く隠そうとしないアンジェリカの裸体を見つめた。

「んん……お姉様たちにもよく言われた」

どうやら、複数の姉がいるらしい。が、今のキュルケはそんなものに興味がない。

その後、幾つかアンジェリカの容姿を話題にしつつキュルケは彼女に合いそうな服装を幾つかを見繕った。その中で比較的ゆったりとしたワンピースタイプの服をアンジェリカは選んだ。下着も一応貸し与え、見事アンジェリカは全裸から脱出したのだった。

「……わざわざ下着まで貸してくれなくてもよかったのに」

違和感があるのか、どこかぎこちない様子のアンジェリカ。

「今はとりあえずそれで凌いで頂戴。あとでちゃんとあなた用に服とか買ってあげるから」

「はふ。何から何まで……ありがとう」

素直に感謝を述べるアンジェリカに、キュルケは暖かな笑みで彼女の頭を撫でた。

「……んん、下着慣れしてないせいかな胸が少し苦しいかも」

が、照れ隠しに胸を押さえながらそう言ったアンジェリカに、キュルケはピシッと音を立てて凍り付いた。悪意がない純粋な一言なだけ、ダメージは大きかった。だが、サイズ的な意味で言っているのではないという事を理解していたキュルケは、すぐに自分を取り戻すとアンジェリカの頭を軽く叩いて言った。

「そろそろ朝食の時間だね。行きましよう？」

アンジェリカは笑顔で頷いた。

軽く身嗜みを整えたキュルケの後に続いて部屋を出たとき、アンジェリカは思わず表情を強張らせてしまった。

キュルケ越しに見える桃色髪の気の強そうな少女に、キュルケを見て鼻の下を伸ばしているらしい黒髪の少年。何だか見覚えのある服装をしている少年はともかく、その隣にいる少女の方が問題だった。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
アンジェリカの双子の姉である。

ルイズはアンジェリカに気付いていないのかキュルケを忌々しそうに睨み付けており、幸いにもその間にアンジェリカは冷静になれた。とは言え、次に掛けられるキュルケの言葉で焦ってしまうのだ

が。

「ふふ、どうせ同じ平民なら可愛い女の子を召喚しなさいな」

一気にアンジェリカに視線が集まる。キュルケは自慢気に、少年は一瞬目を見開いて鼻の下を伸ばし、ルイズは案の定信じられないものを見る表情となった。

さりげなくこの場を抜けるつもりでいたアンジェリカは曖昧な笑みを浮かべて諦めると、一応習った淑女としての礼を取る。

「アンジェリカと申しますわ。以後、お見知りおきを」

微笑み、優雅に礼をするアンジェリカをキュルケは感心したように見つめ、少年は真っ赤な顔でゴニョゴニョ返事をし、ルイズと言えぱやっぱり信じられないと言ったように口をパクパク閉口させていた。

やがてルイズはキュルケを見やってから勢いよく駆け出して行った。アンジェリカに見惚れていた少年は一瞬遅れてルイズを追い掛け、キュルケは可笑しそうに笑い声を上げていた。

アンジェリカはキュルケとは対象的に寂しそうな笑みを浮かべて視線を下に落とした。どうやら、未だにルイズからは恐れられているらしい。そして今の反応を見るに、彼女とは他人として接するしかないようだ。

まあ、ルイズとしてもそちらの方がやりやすいだろう、と達観したようにため息を吐いたアンジェリカはそこでキュルケに頭を撫でられた。

「……………何？」

不思議に思って首を傾げるが、キュルケは柔らかな笑みで頭を撫

でるだけ。

キュルケも鈍感ではなく、先程の彼女達の反応を見て何かしらの事情を読み取ったようだが、無粋に聞いたりしないのは彼女なりの優しさなのだろう。ともかく、アンジェリカは嫌な気分はしなかった。なので黙って彼女に頭を預けていた。

アルヴィーズの食堂に着いた二人は、一度扉の前で立ち止まった。

「アンジェ、さっきはノリで平民って言っちゃったけど、あなた貴族よね？」

「……え？ うん」

「すげえ、と言いたげにその扉を見ていたアンジェリカは反射的にそう答え、ハツとして口を塞ぐ。だが、時既に遅く、恐る恐る見上げた先のキュルケの表情はどこか面白そうに、しかし優しげな笑みを浮かべていた。

「私もそこまで鈍くないから無理に聞いたりしないわ。でも、いつかでいいから事情を教えて頂戴ね」

そう言っただけでウィンクするキュルケは魅力的で、アンジェリカは彼女に見惚れていた。そしてふわっと笑みを浮かべて、心から思った事を口にする。

「キュルケっていい女だね」

「あら、ふふっ、ありがとう。そういうあなたも素敵よ」

そしてどちらともかく笑い合つと、二人で同時に食堂に足を踏み入れた。

どこかの主従と違い、もう既に彼女たちは心を通わせているようだった。

「……はふ、すっ……」

アンジェリカは食堂に入った途端、そのきらびやかな空間を前に感動したように目を輝かせていた。彼女の実家であるヴァリエール家の食堂も割りとすごいのだが、こちらはあちらと比べて人数により生まれる活気が凄まじく、それだけで天と地程の差があった。

キュルケはそんなアンジェリカを微笑ましそうに見やってから、途中で見つけたタバサの元に向かう。アンジェリカも遅れずキュルケに着いていき、もの珍しそうに周囲を観察し続けていた。

「おはよう、タバサ」

「ん」

タバサの隣に腰掛けたキュルケに習い、アンジェリカもタバサに挨拶をしてキュルケの隣に腰掛けた。

アンジェリカがワクワクドキドキと言った様子で周りに目を向けていた中、キュルケは適当に二人分の食事を身繕いタバサとの会話に花を咲かす。その次いでに寄ってきた男子生徒達とも会話をし、程なく運ばれた食事を優雅に口に作る。アンジェリカもアンジェリカで男子生徒に口説かれていたが、適当な返事と愛想笑いで対応してとある一点を見つめる。

「流石はキュルケが召喚したとだけある。可憐な少女じゃないか」
「その通りだ！ 主人であるキュルケとはまた違った美しさがある」
「あら、お二人とも。私じゃなくてこの子をお選びになるの？」

柔らかなパンをちまちま食べながらそんな会話を聞き流し見つめる先には、アンジェリカの双子の姉ことルイズと黒髪の少年がいた。ルイズは何やら不機嫌そうにシチューを頬張っているが、少年は床に直に座って目の前に置かれた皿に盛られた寂しい食事を心底絶望したように口に出している。

我が姉はそんなプレイがお好みなのかと少年を哀れみ、キュルケに勧められたステーキを受け取るうと少年から目を外そうとしたが、

「うぐっ」

寸でのところで少年がアンジェリカの視線に気がつき、すごく寂しそうな子犬のような瞳を向けられた。

流石に無視できなくなったアンジェリカは、その少年を手招きした。少年はアンジェリカの意を汲み取ったのか、ルイズにバレないように移動するとすごく期待を込められた目でアンジェリカの側まできた。

キュルケ達を取り囲んでいた生徒達の誰かが少年を怪訝に見やるより早く、アンジェリカは先程キュルケに頂いたステーキを少年に分けてあげた。あまりやり過ぎるとルイズに怒られるだろうと見越し、しかし極力量を減らさず尚且つ素早く食べられるよう一口サイズにして。

「ごめんね、これだけしかあげれなくて」

「いいえッ！ ありがとうございますッ！」

少年は思わず引いてしまいそんな程感謝を述べ、ご主人様に叱られる前にと急いでルイズの元へと駆けていった。

アンジェリカはそんな少年を複雑な思いで見送り、そして先程の一連を見てアンジェリカを褒め称えるキュルケの取り巻き達に愛想笑いを向けた。

第三話：使い魔同士の親睦

朝食の後は魔法の授業だ。引きこもり生活で本当なら自分もここで生徒をやっていたはずのアンジェリカにとつて食堂の時以上に興味をそそられるらしく、終始にこにこ笑みを浮かべてキュルケの隣に座っている。途中で姉ルイズが少年を連れて教室に入った時は流石に笑みが成りを潜めたが、教師を待つまでの短い間に気持ちを切り替えられた。辺りに生徒達の使い魔がいて、彼女の好奇心を引き出していたおかげだろう。

やがて、アンジェリカの待ち望んだ魔法の授業が始まる。

教室にやってきたふくよかな女性教師は、まず教壇に立つと教室を一瞥して人の良い笑みを浮かべた。

「皆さん、おはようございます。春の使い魔召喚は大成功のようですね」

シュヴルーズと名乗った女性教師はそう言ってもう一度教室を見渡し、その時目が合ったアンジェリカはとりあえず笑みを返してみる。

「なかには変わった使い魔を召喚された生徒もいるようですが……」
「召喚できなかったからって平民の男を連れてくるなよ！ ゼロのルイズ！」

シュヴルーズはアンジェリカの事を指して言ったつもりのようだが、勘違いを起こしたらしい男子生徒ががら声でアンジェリカの姉であるルイズをバカにした。

クスクスと笑い声起き、バカにされたルイズが音を立てて立ち上がり、先程のぼつちやいな生徒に突っ掛かる。流石にアンジェリ

カも今のやり取りで姉の境遇を理解してしまっただらしく、困ったように眉を潜めた。

嫌われているとは言え、姉であるが故にルイズを大事に思うアンジェリカは、幸いギリギリ届く『見えない腕』でぶん殴ってやるうかと企てたのだが、彼女が行動を起こす前にシュヴルーズが騒いでいる生徒達を静めた。

「……………他の皆さんも、今の話題を蒸し返すようなことがあれば、この粘土でその口を閉じます。よいですね？」

一体何をしたのか……………と言っても魔法ではあるが、ルイズをバカにしていた生徒達の口を粘土で物理的に塞いだシュヴルーズは多少強引ながらも授業を始める。

「ふ……っ!？」

「……………マリコル又?」

アンジェリカは心の内でシュヴルーズに感謝を述べ、既に伸ばしていた『見えない腕』で最初にルイズをバカにした生徒の鼻っ柱をデコピンし、初めての魔法の授業に臨んだ。

その時何か気づいたららしいルイズがハッとアンジェリカを見やっただが、もう既に授業に意識を傾けていたアンジェリカがその視線に気づく訳もなくルイズは複雑な面持ちで席に座った。

「じ、じいゴールドですか、先生!？」
「んえっ?」

授業の中頃を過ぎた辺り。授業についていけなくなり、早くも居眠りを始めたアンジェリカを覚ましたのはキュルケが立ち上がる音と興奮した声だった。

すっかり熟睡していたアンジェリカは可笑しな声を上げて過剰反応し、一体何事だと教室をキョロキョロと見回す。

「いえ、これはゴールドではなく真鍮です。ゴールドを作れるのはスクウエアです。私は……トライアングルです。」

隣のキュルケがあからさまに落胆し、そこでようやく教卓の上にキラキラ光るものがあるのに気がつきアンジェリカはじーっとそれを見つめた。

「……はあ、何だか恥ずかしいわ。あら? 目が覚めたのね」

勘違いして取り乱した事を恥じているのか、少し頬を赤くしたキュルケが照れ隠しの用量でアンジェリカの頭を撫でた。まるで無意識に猫を撫でるようなその撫で方にアンジェリカは目を細め、キュルケに視線を移す。

「何があつたの?」
「ミセスが石ころを錬金して真鍮を作り上げたの。錬金ってわかるかしら?」

「ええと……うん、一応」

確か、上から二番目の姉がたまに見せてくれていた、とアンジェリカは過去に思いを馳せた。

一応、アンジェリカも魔法については実家で話を聞いている。だが、時期も時期でそんな余裕がなかった彼女は、自分からも人を突っぱねていたことも災いして結局魔法を習わず今まで過ごしてきたのだ。今思うともったいない事をしたなあ、とアンジェリカは眉を垂れさせた。

「はふ……せつかくのふあんたじー人生を無駄に過ごすなんて……」

「うん？ 何か言った？」

「なんでもないよ、マスター」

うつかり呟いていたらしい言葉を満面の笑みで誤魔化すアンジェリカ。キュルケは曖昧に笑うと、シュヴルーズに注意されてしまわないよう授業に意識を向ける。

そして、そこで顔を青くさせた。

「では、錬金のおさらいをしましょう。ミス・ヴァリエール」

ヴァリエール、と言う単語に反応し教壇に目を向けるアンジェリカ。どうやら我が姉の出番のようである。

思わず応援しそうになったのを堪え、何となくキュルケに目を向けたところで彼女の異変に気がついた。

「……キュルケ？」

「……危険だわ」

アンジェリカの呼び掛けに答えずにそう呟いたキュルケは、ゆらりと立ち上がるとシュヴルーズに言った。

「ルイズに魔法を使わせてはだめです！」
「どういう事？」

少しむっとした様子でアンジェリカがキュルケの服を掴むが、ほぼ同時に他の生徒がキュルケと同じような反応を見せた為彼女の言葉は掻き消されてしまった。

次第にポリウムアップしていく生徒達の声。それは悲鳴や懇願といったもので、アンジェリカは訳がわからないと言った様子で生徒達とルイズを交互に見やった。

「やりますッ！！」

その一言で一瞬教室内が静まり、一瞬後に再び騒がしくなる。ふと、近くに座っていた筈のタバサが居なくなっている事に気付きます。すます訳のわからなくなったアンジェリカは、困惑した様子でルイズに顔を向け、

「ふんっ！」

目が合った途端キツと睨まれた拳げ匂に視線反らされ精神的ダメージを負って涙目になった。

しかし、アンジェリカに落ち込んでいる暇などなかった。

「もっつ！ アンジェ、机の下に隠れて！」

「え？ な、きやつ」

キュルケは突然必死の形相でこちらを見るや否や、アンジェリカを強引に抱き寄せて机の下に身を隠した。キュルケの豊かな胸にダイブしたアンジェリカは何を勘違いしているのか「ちょ、マスター、

授業中なのに」と訳のわからない事をのたまって頬を赤くし、しかし突如発生した爆発に驚き無我夢中に彼女にしがみついた。

「て、てる！　じばくてろ！　いやあ〜〜！」

生徒や使い魔の悲鳴、そしてキーンと耳鳴りがする中、可笑しな悲鳴を上げるアンジェリカ。よくよく聞けば似たような言葉を叫ぶ少年の声があったが、今の彼女にそれを耳にする余裕などない。数秒後、無事だと確認しても突然の爆発によるショックは抜けきらないようで、心臓をバクバクさせて未だ強くキュルケにしがみついていた。

「……………ちよつと失敗してみたいね」

「何がちよつとよ！　アンジェが怯えてるじゃないの！」

どうやら、先程の爆発はルイズが起こしたらしい。それを理解したアンジェリカは、脳裏で昼夜問わず実家で何度か爆発音が響いていた事を思い出して納得するのだった。

「あの爆発が我が姉のものだったとは……………」

誰もいない部屋の中、ベッドで丸まっていたアンジェリカはしみりとした口調でそう呟く。

あれから授業は中止となり、お化粧直しにとキュルケに連れられ部屋に戻った彼女はまだ収まりそうになかった緊張を解くべくベッドに潜っているのだ。引きこもり生活をしていたアンジェリカにとってルイズが起こした爆発は予想以上に強力だったようで、今なら姉に恐れられる気持ちがあるかも、とアンジェリカは微妙な納得をしている。

「……はふ。ご飯、食べに行こう」

しかし、いつまでもベッドで丸まっている訳にもいかない。彼女の様子を鑑みてか、後で昼食を持ってこさせると言って先に食堂に行ってしまったキュルケを追うべく、アンジェリカはのっそりベッドから這い出る。

別に、持ってきてくれるならわざわざ食堂に行かなくてもいいのだが、やはり誰かと一緒に食事を取りたかったのだ。引きこもり、人を突っぱねていたことと今さら誰かとなんてと思わずと一人で食事をしていたアンジェリカにとって、これはまたとない機会である。

一人で食べるより、誰かと一緒に食べる方が食事も進むのだ。

そう思い立ち、アンジェリカはキュルケから借りている服装の乱れを直してから部屋を出ていった。

「むむつ。あれは……」

食堂に向かう途中、何やらげんなりした顔の少年を見てアンジェリカはにっと笑みを浮かべた。

その少年とは、彼女の姉ルイズと一緒にいたあの少年である。珍しい服を着た黒髪の少年は、これまで耳にした会話によればアンジェリカと同じ使い魔になった人間であるらしく、彼について興味が湧いたアンジェリカは次いでに落ち込んでいるらしい彼を慰めてやるうと少年に近づいていく。

「……あつ、君は」

早速近づいてきたアンジェリカに気づいたらしいその少年は、彼女を見るや一瞬笑みを浮かべると気まずそうに視線を反らした。

「やつほー。こんなところで何してるの？」

今さら気がついたのだが、この少年割りと背が高い。一般男子にしてみればごく平均なのだろうが、一般女子よりやや背が低いアンジェリカにとって正に大人と子供のような視線だった。

「……胸には栄養いくのになあ」

「え？」

「あ、ううんなんでも。それで、どうしたの？」

身長が伸びないのを嘆き、うつかり呟いてしまったのを満面の笑みで誤魔化しアンジェリカは少年の顔を覗き込んだ。ぐつと近くなつた事に少年はたじろいだが、やがて観念したように苦笑すると恥ずかしげに切り出した。

「……いや、実はルイズ……ええと、俺使い魔らしいんだけど、ご主人様をバカにしたことで追い出されちゃったんだ」

「あらまあ……自業自得って奴？」

少しむっとした口調で言うアンジェリカにうつと声を詰まらす少年。

しかし、短い間ながらも彼ら主従の関係を少しながらも把握していたアンジェリカはそれ以上彼を咎めたりしなかった。

「でもさあ……いきなり変なところに連れてこられた挙げ句に駄目犬扱いされてよ……ちょっとぐらい反発したっていいだろ？」

「うーん……」

何やら期待の籠った眼差しを向けられるが、アンジェリカはそれをスルーする。

確かに、彼の立場で考えれば致し方ないと思う。だが、やっぱり姉の使い魔となったならバカにされている主人のフォローをしてもらいたい。……とは言え、これが身内贖罪な考えであることなどちゃんとわかっている。ばか正直にこんな事を言っても、彼にはちゃんと伝わってくれないだろう。

だから、アンジェリカはいたずらっぽく笑って少年の両頬を摘まむ事にした。

「あ、あの、あ、アンジェリカさん……？」

いきなりのボディタッチにどぎまぎした少年は、顔をやや赤く染めて視線をあちこちにさ迷わす。それがおかしく、アンジェリカはふふつと笑いながら少年の頬を押ししたり引っ張ったりした。

端から見れば、仲睦まじい恋人同士のやり取りだ。

「はふ……そう言えば、君の名前を聞いてなかったよ」

一頻り少年の頬を楽しんだアンジェリカは、満足そうな顔をして彼の頬から指を離した。

「え、えと、サイト。平賀才人っす」

どことなく鼻の下を伸ばした才人は、アンジェリカの胸元を見ながら自己紹介した。ちっこい癖しておっきなそのお胸は、彼の視線を釘付けにするようだ。

しかし、その手に疎いのかそれに気づかないままアンジェリカは脱線していた本来の目的を口にした。

「あたしはご飯食べてくるね。サイトも一緒に来なよ」

「え？ あ、いや、でも俺追い出されちゃったし……」

「あたしと一緒に居れば大丈夫だよ。……まあ、後が怖いかもしれないけど」

「ええっ!?!」

心底絶望した風に叫ぶ才人にコロコロ笑って、アンジェリカは彼の手を取って食堂に入ろうとした。

ナチュラルに手を握ってきたアンジェリカに鼻を伸ばし、そのまま着いていこうとした彼を 正確にはアンジェリカを止めたのは一人のメイドの声だった。

「うん？ なあに？」

急に立ち止まったアンジェリカにぶつかりかけながらも止まった才人は、未だに鼻の下を伸ばしたまま声のした方に目を向けた。

そこにはカートを押した黒髪のメイドが立っており、手を繋いだ彼女らを見て勘違いしているのかやや頬を赤くしている。

それを理解してか、才人は慌ててアンジェリカから手を離れた。アンジェリカはそんな彼を見て微かに笑い、メイドの返事を聞こうとそちらに顔を向ける。

「ええと、あなた方はミス・ツエルプストーとミス・ヴァリエールの使い魔ですよね？」

「うん、そうだよ」

答えて、メイドの身なりから何か察したのかアンジェリカは思い付いたかのように才人に振り向くと嬉しそうな声色で言う。

「丁度いいや、使い魔同士の親睦を深めるってことであたしと一緒にご飯たべよつか、サイト」

「え？ あ、うん、俺はいいけど……」

言外に遠慮を見せる才人であるが、アンジェリカはそれを敢えてスルーしてメイドに才人の分の食事を用意するように言う。次いで一緒に食べられる場所を設けて貰えるということ、アンジェリカは才人の手を引っ張ってメイドの案内に付いていくのだった。

「うめえ！！」

心のそこから正直な言葉を叫んだ才人は、ニコニコ笑うアンジェリカと同じようにニコニコ笑うシエスタと名乗ったメイドの前でシチューをかき込んだ。

純情チエリーボーイな才人は、アンジェリカのスキンシップに最初は緊張しまくりで厨房の隅に設けられたテーブルについてもガチガチに、それでもって鼻を伸ばしていたのだが、いざ食事となるとすっかり元通りになってしまっていた。

が、がつがつと掻き込んでいた手はみるみる内にスピードを落とすしていくと、一体何を思ったのか突然涙を流し始めてしまった。

「……サイト？」

アンジェリカの心配した声にハッと気づいた才人は、ごしごしと袖で涙を拭き取ると快活な笑みを浮かべた。それを見たシエスタは彼の笑顔に見惚れたのか頬を赤くしぼんやりと、アンジェリカは一瞬怪訝そうにしたが何か察したらしく暖かな笑みを浮かべる。

そんな二人に才人は恥じらうような素振りを見せると、残り少ないシチューに視線を落としてポツポツと切り出した。

「……俺さ、実を言うと結構追い込まれてたんだ。見知らぬ世界にいきなり放り出されてさ、訳のわからないままルイズに怒られて叩かれて……これは悪夢なんだって思って寝ても、起きたら何にも変わってないってがっかりして。このままルイズに犬みたいに扱われるんだなあって思ってた矢先にさ、こんな優しくしてくれる人たちがいて俺、感激して……」

まあ酷い！ とシエスタが声を上げたが、アンジェリカは苦笑めいた表情で才人を見つめていた。

確かに、そんなことだろうとは予想していたが……いやはや、我が姉は日頃の鬱憤を予想以上に使い魔に吐き出していたらしい。流石に同情を禁じ得なかった。

「そう言えば、アンジェリカも使い魔なんだよな？ 大変じゃないか？」

「うちのご主人様は良い女だからね。サイトみたいに酷くはないよ」

アンジェリカを気遣うつもりで言った才人だが、予想に反した答えが返ったせいか複雑な笑みを浮かべている。シエスタはシエスタで会話に入ろうとしているが、何て言えばいいのかわからず二人を交互に見るだけだった。

「その………可笑しな話をするかも知れないけど、アンジェリカも異世界から？」

おずおずと聞いてくる才人に、アンジェリカは敢えて首を傾げてみせた。そして、やっぱりそうだよなと引き下がる彼に時間差で答えを返した。

質問に質問という意地悪な形で。

「サイトはトーキョーから来たの？」

「ぶはあ！？ げほ、あ、ああアンジェリカも！？」

ニコニコ笑うアンジェリカに詰め寄る才人。シエスタは最早会話についていけないと理解したのかいつの間にかいなくなっている。

「残念ながら、サイトみたいにチキュウからきたわけじゃないんだ」

「へ？ あの、なら………」

「あたしは列記としたハルケギニアの人間だよ。訳ありだけど。…

…そうだね、元チキユウ人っていったところかな？」

「はあ？　と言いたげな表情をする才人にアンジェリカはクスクスと笑ってみせた。

今のところは、彼女が抱えている秘密の一つをたつた一日そこから出会った人間に打ち明けるつもりはないらしい。さっきの言葉で才人がそれに気付くのは別に構わないが、やはりアンジェリカとしては肉親にまだ教えていない事を、幾ら『元同郷』の人間とは言え教える事を躊躇ってしまうようだ。

才人もアンジェリカがそれを言わないと理解したのか、未練がましそうだが聞いたりはしなかった。

「んん、そう言えばサイトのルーン」

どことなく微妙な空気を払ったのは、それを作り出した原因でもあるアンジェリカだ。彼女はふと目にはいった才人の左手の甲を注視し、ほらと言って自分の左手の甲を才人に見せた。

「あたしとお揃いだね」

ニコニコと、本当に嬉しそうに。思わず頬の熱が上がるのを自覚した才人は、ぎこちない様子でそれに頷いた。

もしかして、この子。

才人が彼女の態度を見てそう考えるのは当たり前かもしれない。ともかくこの時の彼は、ご主人様に向けられる理不尽な暴力など忘れて楽しい時間を過ごすのであった。

第四話・迷子さん

「何が……何が『そうだね……元チキュウ人って言ったところかな？』だよおー！」

バタバタバタ。ベッドに潜り込んで足をバタつかせたアンジェリカは、やがて力尽きたかのようにぐったりとなる。

異世界の少年との対話は、存外彼女に冷静さを欠かせてしまっていたらしい。昼食の終わり頃によく自分の発言を振り返った彼女は、そこで自分の発言の異常さと恥ずかしさを理解し、才人がシエスタに手伝いを申し出たと同時にご主人様ことキュルケの部屋に逃げたのだった。

そのままうつ伏せにしていたアンジェリカは胸の圧迫感に耐えきれなくなり、仰向けになる。何とも言えない表情で天井を見上げる彼女の顔は、羞恥によって赤く染まっていた。

「……厨二に思われたら……ああううう」

無意識に発現させた無色透明触手をブンブン振り回し、部屋の中で風を切る音が乱発する。

「ああっ!?!」

バコンと壁を殴り付ける音を聞いて跳ね起き、そこでようやく我に返ったアンジェリカは一度深呼吸して心を落ち着かせる事にした。

「はあ……。散歩でもしようっと」

若干へこんでるように見える壁を敢えてスルーし、アンジェリカ

はベッドから飛び降りて部屋を飛び出す。

部屋を飛び出し数分、早速迷子になったアンジェリカは若干頭が禿げている男性教師を視界の端に捉えた。

「ええと……誰だっけ」

何やら慌てた様子で駆けて行くその男性教師の遠ざかって行く背中を見つめながらそう呟くアンジェリカ。召喚された日に名前を覚えて貰った筈なのだが、度忘れしたらしい。

そのまま数瞬記憶を巡ったアンジェリカだが、男性教師が曲がり角に消えると慌ててそれを追いかけた。割りりと、必死で。

今彼女は迷子なのだ。ここで彼を見失うと、部屋に戻れなくなる。

「は、速っ、もう、いないし」

しかし、全裸引きこもり生活の弊害か、駆け出して数秒で息を切らしてしまった。オマケに完全に見失ったらしく、アンジェリカは息切れの苦しさも相まって涙目になるのだった。

だが、そんな哀れな彼女にちょっとした救いが。

「あ、あれは……！」

曲がり角を曲がった先に見えた、一つの扉。寮の扉と比べてやや敵めしい雰囲気のあるその扉を、アンジェリカはまるで迷宮の果てにある出口を見つけたかのような感動した面持ちで見つめた。

「迷子脱出……！」

力強く握り拳を作ったアンジェリカは、迷わずその扉に突貫。途

中で足をもつらせこけかけたが、なんとか無事に辿り着き、ノックもしないまま扉を開け放つ。

「うむ？」

扉の先で彼女が見たのは、髭がとても長い何だかただ者ではなさそうなお爺さんと、先程見失った頭が少し寂しい男性教師。

何処と無く重苦しい雰囲気満ちていたその部屋は、しかし空気が読めなかつたらしいアンジェリカの一声で一変する。

「迷子です、迷子になっちゃいました！」

「は？ 迷子？」

男性教師は突然乱入してそうのたまったアンジェリカにぽかんと口を開き、老人は愉快そうに笑い声を上げた。

「ほっほっほ。そうか、迷子か。君は確か、ミス・ツエルプストーの使い魔であつたな？」

「え？……あ、はい。アンジェリカと申します」

名字で出されたご主人様が一瞬誰のことかわからず反応が遅れたアンジェリカだが、すぐに思い出すと軽くスカートの両端を掴まんでお辞儀をした。

才人との自己紹介の時はわざと意識してやったが、全裸引きこもり生活の前は貴族としての振る舞いを叩き込まれている為、一応無意識にでもそう振る舞えるらしい。

「う……………？」

ふと、頭を下げた事で下がった視線の先の足元でこちらを見上げ

るネズミが目に入った。

何処からか忍び込んだのだろうか、と首を傾げたアンジェリカは一本だけ見えない触手を発現させてそのネズミをひつつかむ。そして窓の外を見やり

「モートソグニル？」

「はえ？」

ブン投げようとしたところでピタリと止まった。

「モートソグニル？」

老人が言った言葉を、アンジェリカがそっくりそのまま復唱。そんな彼女の目の前で宙に浮いたネズミが苦しそうにもがいており、それを男性教師が目を見開いて見つめていた。

「その、アンジェリカ君の目の前に浮いておるネズミじゃよ。わしの使い魔なんじゃが……………」

「っ、使い魔っ!?!」

思わぬ事実アンジェリカは大層驚き、すぐさまネズミを解放する。ポトリと床に落下したネズミは目にも止まらぬ速さで老人の下へ逃げ込んだ。

「これは……………もしや、君は先住魔法を？ いや、だが、君は見たところエルフではないようだ……………」

「は、え？ 先住？ エルフ？ ……ああっ!?!」

どうしてそんな言葉が出てきたのか理解できなかつたらしいアンジェリカは、頭の上にクエスチョンマークを浮かべそうな勢いだ。しかし、すぐに自分が何をして何を見られたのか思いだし、慌てふ

ためいた。

過去にネズミに恨みを持つ事件があつて以来、アンジェリカはネズミを見るととりあえず触手さんで殴り飛ばすか投げ飛ばすかという反射技能を身に付けていた。そして全裸引きこもり生活の弊害か、人の目の前であるという事を忘れて憎きネズミを排除しようとしたのだが……。

「す、すごいですね！ お、お爺さんのネズミさん空を飛べたんですね！ あは、あははは！」

すごくイイ笑顔で全力で誤魔化そうとするアンジェリカ。それは暗に自分がやったと教えているのだが、割りと必死な彼女はそれに気付かない。

「いや、あれはどうみても」

「ほっほっほ！ どうじゃすごいじゃろう？ 実はわしのモートソグニルの隠された能力なのじゃよ。……秘密にしてもらえんかの？」

男性教師の言葉を遮り、アンジェリカの誤魔化しに乗る老人に彼女はブンブンと首を縦に振った。その様子に男性教師も何も言えなくなつたのか、ため息を吐いて眼鏡の位置をずらすだけだ。

「さて、アンジェリカ君は確か迷子になつたのじゃつたかの？」

老人は何処からか取り出した杖を振るとアンジェリカにそう言った。老人の背後にある大きな鏡が何かを映していたようだが、先程杖を振つた時に何かしたらしく今は普通の鏡となつている。

アンジェリカは一瞬そちらに目を向けながらも、この歳で迷子になつた自分を恥じるように曖昧に頷いた。

「この学園は広いからの。今までにも何人か迷子になっておったわ
い」

かっかつかと笑う老人にアンジェリカは安心するようないよ
うな何とも言えない気持ちになるが、恥ずかしいことには変わりな
いので頬を赤く染めている。

「ではコルベール君。彼女を部屋まで案内してあげなさい」
「わかりました」

男性教師　コルベールは反対する事なく頷き、アンジェリカは
彼の案内に従って部屋を出ていった。

「……………ふむ。彼女は確か……………いや、亡くなったと聞いておったが
……………似ているだけの別人、か……………？」

アンジェリカが感謝の礼と共に退室した後、老人は一人そう呟き、
背後の鏡に向かって杖を振るった。

「ええと……………コルベール、さん？」

前を歩く少し禿げた男性教師ことコルベールの後をとことこ着い
て行くアンジェリカは、道中無言の雰囲気能耐えきれず話しかける
ことにした。

「は、はい、なんですか？」

出会いが会いだけに若干意識していたらしいコルベールは、少し声を上擦らせて背後のアンジェリカに振り返る。どうでもいいことだが、その際アンジェリカの胸元に視線が吸い込まれ独身男性として複雑な葛藤を抱いたりした。

ちなみに、今のアンジェリカはキュルケと同じようにシャツのボタンを開けている為、谷間がバツチリ見えていたりする。

しかし、その時自分のことで精一杯なアンジェリカはコルベールの葛藤に全く気付かないまま眉を八の字にして、言った。

「何だか人が少ない、ですね？」

自分から話し掛けておいて話題を全く用意してなかった彼女は、おっかなびっくりと言った様子である。とりあえずさっきから人っ子一人見ない事を気にして口にしてみたが、今この話題はタブーだったのかコルベールの眉が少しだけ細まった。

「生徒達が決闘騒ぎを起こしているのですよ。皆野次馬に行っているでしょう」

「決闘、ですか？」

コルベールの表情に一瞬ヒヤリとしたアンジェリカだが、何処と無く呆れた声色にこっそり安堵のため息を吐いた。

「ええ。なんでも、平民が無礼を働いたと」

貴族社会の世の中で、無礼を働いた平民が一方的に虐げられると言っつのは全裸引きこもり生活をしていたアンジェリカの耳にも届い

ている。今回も、決闘と名ばかりの一方的な暴力なのだろうか、とアンジェリカは悲しげに眉を潜めた。

一応公爵家貴族のアンジェリカだが、そう思えるのは彼女が特殊故か。しかし、コルベールにはそんな彼女が良く映ったらしく、感心したように彼女を見つめている。

「誰も止めに入らないのですか？」

「一応、さつきオールドオスマンに『眠りの鐘』の使用を求めたのですが……放っておけと」

「むっ。それでその平民さんが死んじゃったらどうするんですか」

「それは大丈夫かと。恐らく、彼が本当に『ガンダー』」

平民とは言え、個人の命を心配するアンジェリカの態度にウンウン頷いていたコルベールは、無意識に返していた言葉の途中でハッと口を閉じた。

「ガンダ……？」

「い、いえっ。彼なら、きっと大丈夫でしょう」

そう言って先程言いかけた言葉を誤魔化したコルベールをアンジェリカはじーっと見つめたが、特に深く聞こうとはしなかった。あくまで聞こうとしないだけでさっさと歩くコルベールの背中を食い入るように見つめているが。

ともかく、そこからは妙な沈黙が続きアンジェリカは無事女子寮にたどり着く事ができたのだった。

第五話：フーケ捜索隊 前（前書き）

相変わらず、原作通りの進行
進展はここらへんから……？

第五話：フーケ捜索隊 前

「あー……あれ、サイトの事だったんだ」

迷子防止の為、学院の構造を把握しようとしたアンジェリカは、偶然たどり着いた広場で見知った顔を見つけてホッとしていた。

そのまま彼 才人と話をし、数日前の決闘騒ぎは彼原因である事知り、驚き半分嬉しさ半分であった。話の中にルイズを思っただけで決闘を受けたというのがあったのだ。

「それで、そのギーシュ……って人？ それからどうなったの？」
「知らねえ。でも、この前の騒ぎで女の子から人気が無くなったみたい」

「でも、ギーシュって人美形なんでしょ？ 逆にそれが良いって言う人もいると思うけど」

「ぐっ……顔か、やっぱりみんな顔なのかー!？」

あははは、とアンジェリカは声を上げて笑う。才人も最初は微妙な表情だったが、おかしそうに笑うアンジェに釣られたか、小さく笑っている。

「まあ、その人はともかく。サイトのご主人様との関係はどうなったの？」

「ん。ああ、まあ、良くなったけど」

「けど？ 何だか歯切り悪いね」

「いや、まあ、うん。……何て言うのかな。その、良くなったと言えば良くなったけど……良くなりすぎというか」

いまいちはつきりしない才人に、アンジェリカは怪訝そうに首を傾げる。

どうやら、話を聞くに才人への接し方が悪化したという訳ではないらしい。大元の原因はギーシュという少年の八つ当たりだが、その時に言ったルイズに対する暴言を撤回させるよう決闘に挑んだのだ。それで悪化したとなったら、さすがに姉ルイズを溺愛しているアンジェリカでも残念に思うだろう。

「……ん、私ってやっぱりシスコンなのかな」

しかし、そうならそうならそうなら真つ先に姉自身ではなく、そんな姉にしてしまった環境に悪意を向けてしまいそうだと考え、アンジェリカは小さくそう呟く。

聞き漏らしたらしい才人が首を傾げたが、アンジェリカは笑みを浮かべて先を促した。

「あ、うん。それが、まるで別人みたいに優しくなったというか…

…鞭で叩いてきてたのがまるで嘘みたいで」

「鞭……？ はふ、サイトったらそういう趣味が……」

「いや違うから！」

冗談冗談と笑い、アンジェリカは腰かけていたベンチから立ち上がる。

「まあ、それなら安心したかな」

今までの彼への仕打ちは、行き場のない怒りや悔しさが悪い形で出てしまったものなのだろう。ルイズはプライドは高いが、心優しい女の子なのだ。

だから、きっと大丈夫だろう。

それははつきりしない予感めいたものだが、アンジェリカはそれを確信できた。無条件に姉を信じる、その思考がシスコンを自覚している要因かもしれないが。

「え……？」

何を思っただか、呆ける才人に背中を向けていたアンジェリカは少しだけ振り向くと、微笑んで言う。

「ルイズと仲良く、ね」

そして、才人の反応を見る前にその場を去った。

「アンジェ、起きて！ 出かけるわよ！」
「んう……？」

翌日、ぐっすり眠っていたアンジェリカの眠りを覚ましたのは少し慌てたキュルケの声だった。

寝惚けた視界にどアップで映る美人なご主人様は、その美貌の表情にありありと焦りを浮かせており、叩き起こされたことで少し不

機嫌になったアンジェリカの眠気を少しだけ吹き飛ばす。

「……どこに？」

「王都よ。タバサの風竜で行くの」

タバサ、とは確かキュルケの友人だったはず。

少し視界をずらせば、確かにそこには青髪の小柄な少女が立ちながら本を読んでおり、アンジェリカはぼんやり器用だと思った。

どうやら、緊急事態であるらしい。一応使い魔として召喚されたなら、主人の為に身を粉にしなければならぬだろう。

そう思い立ち、アンジェリカはバツと勢いよくベッドから起き上がる。あわよくば、その際に眠気を全て吹き飛ばすつもりで。

そして、アンジェリカの些細な企みが成功し、何だかやる気が沸いてきたのだったが、

「ほら、服を着て、すぐに行くわよ」

完全無血に素っ裸だった彼女に予備の服を手渡されてようやく今の自分を思い出したアンジェリカは、恥ずかしさで何に対してかわからないやる気が削がれるのだった。

「どうして貴女は裸だったの？」

びゅーびゅー風が吹き荒ぶ風竜の上。さぶーと言いながらキュルケの谷間に顔を埋めていたアンジェリカは、その状態のままタバサに向いた。

「んー？ ええと、少し前まで裸で生活してたから……かな。なんか、服着ると落ち着かないというか」

「裸ってアンジエ、貴族だったんでしょ？」

胸元で喋るアンジエリカの吐息にくすぐられてか、若干キュルケが顔を赤くしてそう言った。

「うん。どこかはまだ言わないけど、公爵家だった」

「公爵家！？ 嘘、じゃなさそうね……。うわあ、私ったら実はトンドもない子召喚しちゃったのかしら」

さすがにそこまでの上級貴族だったとは思っていなかったらしく、キュルケの顔が大いに強張る。何せ、場合によってはただ事では済まないのだ。まあ貴族という点でただ事では済まないのだが。

「トンドもない……人としてはトンドもないかもしれないね、うん」
「アンジエ？」

自嘲気味に笑ったアンジエは、それを誤魔化すようにキュルケの胸に頬擦りする。それに戸惑いの反応を見せたキュルケを見てアンジエリカが「マスター可愛い〜」などと宣って更に強く頬擦りする。具体的には谷間に顔を突っ込んで左右にぐりぐりと。

美人と美少女だから許される光景ではあるが、それを唯一見ているタバサは先程のアンジエリカの言葉に思うところでもあるのか、じーっとアンジエリカを見つめているだけだ。

それからしばらくは、途中からタバサを無理やり引き込んだ事によって男にとっては目の保養になる光景が上空で繰り広げられるのだった。

キュルケの男遊びはアンジェリカも耳にしている。彼女の使い魔をやっているれば嫌でも耳に入るし、男を取られ嫉妬した女の子に嫌味を言われたりしている。

アンジェリカとしては自分の主人という事になつて彼女がこのような趣味を持つているのは思うところがあるのだが、以前聞いたツエルプストー家の話を思い出し、そういう気質なのだろうと割りきっている。

だが、今日の前でコソコソやっている主人を見てみると、やはりどうにかした方がいいのではないかとアンジェリカは思った。何と言うか、みっともないのだ。

「……ストーカーだよね、これ」

ポツリと呟くアンジェリカの少し先。路地裏に積み上げられた木箱の裏で誰かを覗き見するキュルケがいる。その彼女の後ろでは、周りを警戒しているのか時折チラチラと周囲に目を向けるタバサ、そして、その後ろに呆れた表情のアンジェリカがいる訳だが。

「はあ……………」

キュルケが見ている先にはとある武器屋がある。主に剣などを置いた傭兵向きの店で、今は先程キュルケがこっそりストーキングしていた人物　ルイズと才人が剣を買っているところだ。

キュルケはバレてないと思っっているようだが、当の本人達は学院

を出た時点で気づいていたらしく、追いついた時にタバサが「バレてる」と言っていた。が、キュルケは「気のせいよ」と言っていてストーキングを続行、まるで熱に浮かされたかのような反応であった。

「……あ、ルイズ達出てくるわよ」

キュルケが小さく、しかしどこことなく興奮した様子で呟き、キョロキョロ辺りを見回すタバサに和んでいたアンジェリカは素早く身を隠した。もうバレてるが、一応使い魔として主人に付き合うことにしたのである。

「……なんか、いい感じだね」

アンジェリカはこっそりキュルケの肩越しにルイズ達を見やり、嬉しいようなそうでないような複雑な心境で呟く。

ルイズが笑いながら才人に話しかけ、才人も笑いながらそれに答えているその姿は、少し前の彼らを知っている者が見れば目を見張っていただろう。それぐらい今の二人は仲が良いようで、アンジェリカはちよつとだけ才人に嫉妬心を抱く。

「何よルイズったら。ダーリンにあんな貧相な剣しか買ってあげないなんて。これは私がとっておきをプレゼントしないと」

談笑しながらルイズ達が路地裏を抜けた事を確認したキュルケは、そう言うとアンジェリカの手を引っ掴んで武器屋に向かう。

アンジェリカはやれやれと言った様子でため息を吐いてキュルケに引っ張られて行った。

そして、その日の夜。

キュルケはアンジェリカも巻き込んで色仕掛けで買った剣を持ってルイズの部屋まで訪れていた。

「ふふっ、ダーリンの喜ぶ顔が浮かぶわ」

そう言ってニコニコ笑うキュルケ。アンジェリカはそんな彼女を微笑みながら横目で見つっ、目前にある扉をじーっと見ていた。

最初にキュルケの前でルイズと鉢合わせした日以来、アンジェリカは彼女と真っ向から顔を合わせていない。同じ教室にいる為、授業は何度か目が合った事はあるが決まって向こうから目を逸らされるのだ。

それでアンジェリカは一度だけ本気で泣きそうになった事があったりする。

「さ、アンジエ。行きましようか」

どうしよう部屋に戻るうか、とアンジェリカは先程から全く同じ事を考えていた為、キュルケが杖を取り出しながら言った言葉を聞き逃した。慌てた様子で声をあげるが、時すでに遅くキュルケは扉に向かってアンロックを行使する。

「ダーリン！ 私の愛を受け取ってちょうだい！」

そして、剣を片手にルイズの部屋へと突撃。

アンジェリカはしばらくその場で迷ったが、どうにでもなれと自棄気味に扉を潜っていった。

「じゃあ、魔法で勝負して決めましょう」

アンジェリカが部屋に入ってまず聞いたのは、姉ルイズのそんな言葉だった。丁度キュルケに重なって自分に気づいていないようで、何やら不敵な笑みを浮かべている。

「あら、『ゼロ』のルイズがこの私と勝負ですって？ 話にならないわー！」

「そんな事、やってみなければわからないでしょう？ それとも、口ではそんな事言いつつ負けるのが怖くて仕方ないんじゃないのかしら？」

正に売り言葉に買い言葉。アンジェリカがこのままキュルケの後ろに隠れ続けていようかと考えていたところで、いつの間に険悪なムードへと。

ふと、ルイズの隣で困惑していた才人と目が合い、アンジェリカは一瞬迷って笑みと共に軽く手を振った。

「……いいわ、その勝負受けて立とうじゃないの」

「なら話は早いわ。広場に行くわよ。ついでにタバサ、あなたの風竜を　　っ!？」

ルイズがそう言うって部屋を出ようとした時、漸くキュルケの影にいたアンジェリカに気が付いた。タバサと勘違いでもしていたのか何気無く話しかけてきていたが、その正体がアンジェリカと知ると息を飲んでその場に立ち尽くした。

アンジェリカは緊張して早まった鼓動を抑えるかのように片手を胸に当て、ぎこちなく笑う。

「ルイズ？」

今まで空気と化していた才人がルイズの異変に気付き声をかけ、それでハツと我に返ったルイズは頑張って笑みを浮かべているアンジェリカを一瞥してから、キュルケ達に振り向く。

「何してるの？ 早く広場に行くわよ」

そしてそう告げ、才人から引ったくった剣を片手に部屋を足早に去って行った。

「……変な子。まあいいわ、ダーリン、アンジェ、広場に行きましよう」

アンジェは硬い表情で黙って頷き、才人はいつの間にかガラリと変わってしまった空気に困惑しながら、ルイズを追いかけるキュルケに付いて行った。

第五話：フーケ捜索隊 後

「ちょ、なんでこうなった!？」

双月の光のみが照明となっている夜の広場に、一人の少年の叫びが木霊する。

少年　才人は全身を縄でぐるぐる巻かれ簀巻きになつとおり、恐ろしいことに逆さまの状態で空中に吊り上げられていた。

「うっさい！ 大人しくしないと危ないわよ！」

「今の状態の方が危ないわ！」

割りと高いところまで吊り上げられている為、叫ばなければ声が聞き取りづらい。

そのままルイズと才人は互いに声を張り上げあっていたのだが、それに嫉妬したキュルケが割り込む形で勝負開始を促す。そして、ルイズはどうせ当てられないだろうから、と言う理由でキュルケがルイズに先行を譲り、余裕の笑みでそれを受けたルイズが才人に向かって杖を構えた。

この魔法勝負、恐ろしいことに才人が的とされているのだ。もちろん、危険な為才人本人ではなく彼を吊るしている縄が本当の的ではあるが、どの道危険であることには代わりないだろう。

彼を吊り上げているタバサの風竜が、少しでも難度を上げるかのようにゆっさゆっさと左右に振り、一段と大きくなった才人の恐怖の叫び声が広場に響き渡る。

「ね、ねえ、やっぱり止めない？」

「大丈夫よ。タバサがいるから」

アンジェリカがおずおずとタイミングを見計らっているルイズに
そう言うが、代わりにキュルケがそう返してきた。

今までルイズに無視されてきたアンジェリカとしては、罵声でも
何でもいいから反応を返して欲しかった為横から割り込んできたキ
ュルケにムツとするが、ここで彼女を怒鳴り付けても意味がない。

何とか堪えたアンジェリカは、短くため息を吐くと集中している
ルイズの邪魔にならないように、複雑な面持ちで彼女の傍から離れ
た。

「あ……………」

その時ルイズから小さく声が漏れたのだが、才人の絶叫で掻き消
されてしまい誰の耳にも届かなかった。

「あら、どうしたのヴァリエール？ 早くしないと夜が明けるわよ」

「っ、うるさい！ 集中してんのよ！」

才人に杖を構えたまま立ち尽くしていたルイズをキュルケが煽り、
それを受けたルイズは声を苛立ちで荒げながらも呪文を唱えた。

彼女の杖が一瞬チカツと光り、一瞬後に大きな爆発音が鳴る。例
の『失敗魔法』であるその爆発は幸い才人に当たる事はなかったが、
その爆風と衝撃波によって盛大に揺さぶられた彼は喉がはち切れる
んじゃないかと言うぐらいの声で絶叫していた。

そして、その絶叫はキュルケが放った炎によって縄が断ち切られ、
更に大きくなる。あまりにも悲痛なものだから、アンジェリカは思
わず顔をひきつらせてタバサのレビテーションでゆっくり地面に落
ちた才人を見ていた。

「サイトー？ 生きてるー？」

何やらピクピク蠢いている才人の傍にアンジェリカがしゃがみ、うつ伏せになっっている彼をツンツンつつく。才人はやや間を置いてごろんと仰向けになると、叫びすぎたのか少し掠れた声で不気味な笑い声を上げた。

「おおぅ……もしかしてサイト、お漏らししちゃった？」

「してねえよ！ って、アンジェ逃げ」

憐れむような笑みを浮かべるアンジェリカに、才人がそう言いかけ、彼女の視界に大きな影が映り込んだ。そして、それとほぼ同時にキュルケの悲鳴が響き、何事かとアンジェリカは振り返った。

第一印象は、巨大。あまりにでかいのでマジマジと暢気にそれを見つめていたアンジェリカだが、それが振り上げているものに気が付くと恐怖で身体を凍り付かせた。

それは、石でできた巨大な人形のゴーレム。何処からかいつの間にか現れたそのゴーレムが振り上げた足が、才人とアンジェリカ達を踏み潰そうとしていたのだ。

「あ、う……………」

恐怖で真っ白になった頭は逃げるという選択肢を浮かばせず、恐怖で縛られた身体はいつの間にか才人の髪の毛を鷲掴みして、彼の毛根にダメージを与えていく。尋常じゃない痛みで涙を流しながらも彼女に逃げると叫び続けている才人は大したものであった。

「アンジェー！！」

そんな時、近くにいた才人の声さえ耳に届いていなかったアンジエリカの耳に、ルイズの声が届いてきた。

姉の声は彼女に劇的な効果をもたらし、一瞬で空白の思考を埋めたアンジエリカは瞬時に『見えない腕』を六本全て発現させ、ゴーレムの足の軌道を逸らす。

尋常ではない力を秘めている彼女の『見えない腕』でも、鈍重なゴーレムを押し返すのは厳しい。それに、ただ跳ね返すだけでは、こちらに駆けて来ているルイズにも危険が及ぶ。

アンジエリカによって軌道を逸らされたゴーレムの足は、二人がいた場所を大幅にずれたところを踏み潰す。それを冷や汗を流しながら見届け、アンジエリカは才人を『見えない腕』でぐるぐるに巻き込んで持ち上げ、ルイズの場所まで避難した。

ゴーレムは最初から二人を狙っていた訳ではなかったのか、避難した二人を追撃することなく逃げた方向とは正反対の学院に向かつて歩き始めた。ゆっくりとした足取りだが、巨大な分その一步一步の距離は長く、ゴーレムはあっという間に学院の数ある塔の一つに辿り着いた。

それからゴーレムは躊躇することなく塔の壁を殴り付け、その塔に大穴を空けてしまう。

「あ、アンジエ！ 大丈夫！？」

あまりに圧巻なその光景に、アンジエリカはついさっきまで死の恐怖を感じていた事を忘れてそれに見とれていた。そんな彼女の下にキュルケが慌てて駆け寄り、アンジエリカをきつく抱きしめる。

「うぐ……大丈夫だよ、キュルケ」

本当に強く抱きしめてくるものだから、苦しげに表情を歪ませた

アンジェリカだが不快な感じはせず、むしろ心地好く感じ、安堵の笑みと共に自分を心配してくれる主人を抱き返す。

「ごめんなさいアンジェ。私、あなたを置いて逃げようとしてた」

「怖くて逃げるのは当たり前だよ」

「……ごめんなさい」

少し涙ぐむ彼女をもう一度強く抱き返し、アンジェリカは彼女から離れた。そして、二人の傍で居たたまれなさそうにしていたルイズに駆け寄り、抱き締めた。

「助けようとしてくれたんでしょ？」

「あ……………」

「ありがとう…………お姉ちゃん」

小さく、周りに聞こえない程度の音量でルイズに囁き、アンジェリカは少しだけ涙を浮かべて彼女から離れる。

今まで無視されてきただけに、先程の姉の姿はとても強烈で、あまりの嬉しさに一目も憚らず泣きじゃくってしまいそうだった。

「サイト、怪我とかお漏らしとかしてない？」

そして、アンジェリカは込み上げるものを誤魔化すように先程から『見えない腕』で宙に浮いている才人に振り向き、いたずらっぽく話しかけたのだった。

翌朝、アンジェリカは教員室の前で立つたままこくこくと船を漕いでいた。

教員室の前には学院の教員たちと、昨夜広場にいた一同が集まっております。先日学院に現れたゴーレムの一件で話し合っている。

と言つても、実際に話し合っているのは教員たちだけであり、広場にいた者たちは各々の時間を過ごしている。

アンジェリカは昨夜の一件で嬉しさのあまり寝付けず寝不足で、キユルケはふらふらしている彼女を母性溢れる微笑みで支え、ルイズは先程からアンジェリカを見ながら口を開いたり閉じたりして、タバサは立つたまま読書で、才人は昨日ルイズに買ってもらった喋る剣と時折会話しながら一同を見やっっている。

そんな彼らをよそに、教員たちの話し合いは次第に責任の擦り付け合いへと変わっていく。あまりにもやかましいものだからアンジェリカが不機嫌そうに唸るが、丁度いいタイミングでオールド・オスマンの秘書ことロングビルがやってきて口煩い口論はそこで止まった。

「おお、ミス・ロングビル。今までどこに行っておったのじゃ？」
「申し訳ありません。調査をしていたら遅れてしまつて……………」

アンジェリカは遅れて現れたロングビルを目をぱちくりさせて見つめていた。

教員の口論の端々に『フーケ』という単語が出ていて、いつしか邸に盗みに入っていたのを思い出していたアンジェリカにとって、目の前にその『フーケ』本人が現れるとは思っていなかったのだ。

アンジェリカ以外の皆は当然ロングビルがフーケであることを知らず、彼女が調査してきたという話に耳を傾けている。アンジェリカはそんな彼らを一瞥して、もう一度ロングビルへと目を向けた。

姿は同じであれども、以前会った時と全く雰囲気異なる。しかし、盗賊と秘書との顔を使い分けているのだとしたら、彼女がフーケであることに間違いないはず。

確かめようにも今ここで問いかけることはできない。以前出会った時に彼女に好意を抱いているアンジェリカにとって、ロングビルがフーケであることがバレてしまうような行動はとれなかった。

そう考え、何気に共犯者となろうとしている自分に気がつき、アンジェリカは曖昧な表情となる。

「とにかく、この一件はわしらのみで解決する。王院に無能と評価される訳にはいかんからの。そこでじゃが、今ここでフーケ捜索隊を編成する。我こそはと言う者は杖を上げよ」

アンジェリカが一人悶々と思考を凝らしていた間に話は進み、最終的に広場にいた者皆がフーケ捜索隊として組まれるのだった。

「ととととととと」と揺れる馬車の中、アンジェリカは流れていく景

色を興味津々と言った様子で眺める。

一応馬車には何回か乗ったことがある彼女だが、片手で数える程度でしかない為、馬車での移動は新鮮なものだ。久しぶりに乗るというのもあってか、アンジェリカはこれから危険な場面であるというのに随分上機嫌である。

それに、数日前の虚無の曜日は初めて竜に乗ったということ以最初ははしゃいでいたものの、あまりの高さと寒さに苦手意識を持っており、のんびり移動の馬車の方が彼女は好みであった。

「アンジェ、落ちないようにね」

「はい」

ルイズがどことなく一世一代の覚悟を決めてアンジェリカにそう言い、ますます上機嫌になったアンジェリカはニコニコ笑みを傍にいるルイズに向ける。ルイズは心底安心したように表情を緩め何か話そうと口を開きかけるが、アンジェリカがルイズの傍を離れて行ったので少しだけ寂しげな表情を浮かべた。

上機嫌で周りが見えなくなったアンジェリカが向かった先は、御者を買って出たロングビルことフーケの下。彼女はロングビルの隣に腰かけると、ニコニコ笑みを隠そうとしないままロングビルに顔を向けた。

「久しぶりだね、盗賊のお姉さん」

そして、何も考えずに爆弾を投下してしまう。

「なっ!?!」

ロングビルの持つ手綱が一瞬跳ね、馬車全体が揺らいだが、直ぐ

様冷静さを取り戻したロングビルによって事なきを得た。

「私が盗賊、と？」

ロングビルはほっとため息を吐くと、「冗談めかした口調でそう返す。顔こそ微笑んではいるものの、その瞳はアンジェリカを悟られない程度に警戒していた。

「あれ？ 私のこと忘れちゃった？」

未だに爆弾発言に気づかないまま、しかし中途半端に冷静なのか小声でアンジェリカがそう言う。

「あ、そっか。ごめんなさい……ちょっと嬉しくて浮かれてたみたい」

ロングビルが人違いではと返そうとしたところで、少しだけ気持ちを落ち着かせさせたアンジェリカが謝罪を述べ、ロングビルの傍を離れようとする。それが、自分を盗賊であることを誤魔化そうとしていたロングビルの考えを変えたのか、彼女はアンジェリカを呼び止めた。

「……あなたは、私の正体を知っておいで？」

「フーケさん、でしょ？」

単刀直入にそう切り出したロングビルに、アンジェリカが真剣な面持ちで頷く。ロングビルは自分の計画が破綻したと考え、表面上は秘書の顔で、しかしその瞳に敵意を宿らせる。

そんな彼女の様子を見て、アンジェリカは不思議そうに首を傾げた。

「あれ？ 本当に私のこと、覚えてない？」

「……覚えていても何も、初対面だよ」

「むう？ アンジェリカだよ。この前」

彼女の言葉は突然背後から抱き着いてきたキュルケによって断たれてしまう。

「ちょ、どうしたの？主人様？」

「あーん、聞いてよアンジェ。ダーリンだったら全然構ってくれないの」

そのまま先程の話など続ける事など出来ず、アンジェリカはキュルケに引つ張られて才人への二人がかりの色仕掛けに付き合わされ、一人残されたロングビルはアンジェリカの事で延々と思考を巡らすハメとなるのだった。

「あれが、フーケの隠れ家です」

そう言ったロングビルの指先に、一つの小さな小屋が建てられている。

倉庫としてか、はたまた誰かが隠居用にでも作ったのかわからないが、今では廃墟になっているあの中にもいるかもしれないフーケの

事を考え、一同は緊張で表情を引き締めていた。

「で、どうする？」

才人が剣の柄に触れながらその場にいた全員に振り返る。

「サイトが偵察で、私たちは待機。フーケがいたら誘き出して私たちで一斉攻撃。……ミス・ロングビル、申し訳ありませんが周囲の警戒をお願いします」

作戦を言おうとしていたのが、口を開いたタバサより先にルイズが淡々とした口調で作戦を告げた。いつもと雰囲気が違うルイズに皆一瞬気をとられたようだが、異論はないらしくすぐに行動に移った。

そして、サイトが小屋に向かい、ロングビルが一人周囲の見回りに離れたところで、ルイズが残りの3人に振り返る。

「あの小屋にフーケはいないでしょうね」

「なぜわかる？」

「女の勘よ」

タバサの疑問にうつすら笑みを浮かべて答えたルイズの言葉を証明するかのように、偵察に向かっていた才人が中には誰もいないというジエスチャーをしてきた。

「へえ、やるわねヴァリエール」

「ありがとうキュルケ。……さあ、フーケがいつ来るかわからないから気を引き締めて行きましょう」

そう言つて、隠れていた茂みからルイズが飛び出し、やや視線を鋭くさせたタバサが遅れず付いていく。キュルケも先程から黙っているアンジェリカの手を取ると、周囲を警戒しながら二人を追いかけた。

「どうするよ。フーケって奴いないぜ？」

「中を見てみましょう。ひよつとしたら『破壊の杖』があるかも」

タバサが小屋に『探知』の魔法を唱え畏がない事を確認し、才人が小屋の中へと入っていく。十数秒経つと、才人が『破壊の杖』を片手に小屋から出てきた。

「なんでこれが……」

「これが『破壊の杖』？ 変な形してるのね」

才人が理解できないと言つた表情で『破壊の杖』に視線を落とし、キュルケがそれを見て率直な感想を述べる。

タバサも不思議な形をしたそれに興味を抱いたのか、指先で形をなぞっている。アンジェリカは才人と同じような表情を浮かべ、その『破壊の杖』を凝視している。

「とにかく、目当ての物は見つかつたし、早いとこ学院に戻ろう。」

オールド・オスマンに聞きたいことがあるし」

「フーケのゴーレムよ！ 皆伏せて！」

そう言つて『破壊の杖』を才人が肩に担ぎ、キュルケが賛同の声を上げる。そして、丁度その時に小屋をズシンという音と共に揺れが襲い、窓の外を眺めていたルイズが警戒の声を上げ真つ先にアンジェリカに駆け寄つて床に伏せた。

慌てて他の皆も床に伏せ、それから一瞬間を置き轟音と共に小屋

の天井がゴーレムによって破壊される。

いきなりルイズに押し倒され困惑していたアンジェリカは、身の危険を感じて姉の身体の下で小さく丸まり、すぐにハツとしたようにルイズを見上げた。

「大丈夫？ アンジェ」

天井の破片が当たったのか、僅かに表情を歪ませたルイズがアンジェリカを安心させようと微笑む。しかし、アンジェリカは泣き出しそうな表情で声にならない声を上げるしかできない。

「立てる？」

「あ……………う、ん……………」

自分を心配してくれる姉に喜びを感じつつも、すっかり恐怖に捕らわれてしまい震える身体は、ルイズに手を貸される事でようやく立ち上がることができた。

「みんな無事か！？」

「っ、ゲホッ、アンジェ！ 良かった、無事みたいね……………」
「……………不覚」

才人、キュルケ、タバサが順に瓦礫の下から出てくる。どうやら全員特に怪我を負った訳ではなく無事らしい。

「この場を離れるわよ！」

「言われなくても……………！」

ルイズがアンジェリカの手を引いて駆け出し、遅れず皆も壊された小屋から一時避難。

「つぐ……!?」

才人が足止めとしてキュルケから貰った剣で応戦していたが、巨大なゴーレムのパンチを真正面からそう何度も受けれるはずがなく、すぐに使い物にならなくなった。

「ダーリン、離れて！」

キュルケの声を聞き、才人がもう一つのルイズに買って貰った喋る剣を片手にゴーレムから離脱。それから間もなく、巨大な火の玉がゴーレムに直撃するが……。

「効いてない!?」

炎に包まれたゴーレムは未だ健在。それどころか、キュルケの炎を纏ったゴーレムは更に危険性を増している。

「なんで、こんな……」

アンジェリカが燃え盛るゴーレムを見てそう呟く。ルイズがどうかしたのかと振り返ったが、アンジェリカは応えられず力なく頭を振った。

「タバサ、あの炎を消して！」

ルイズの指示にタバサが頷き、氷の魔法でゴーレムの炎を鎮火。続けて風の魔法を放つが、大してダメージがないようだ。

「……これ以上は無理。撤退」

しばらくタバサがゴーレムを牽制していたが、精神力が底を突き始めたのかうつすらと額に汗を浮かべてそう言った。そして、指笛を吹いて風竜を呼び出す。

「サイトっ！ あのデカブツをやるわよ！」

「どうやってだよ！」

「『破壊の杖』よ！ あんたなら使い方がわかるはずだから！」

ルイズの言葉に才人が目を見開き、ゴーレムに襲撃された際に落とした『破壊の杖』を急いで取りに向かう。その間にルイズが失敗魔法で才人から注意を逸らさせ、タバサの風竜にアンジェリカを乗せる。

「ルイズも、早く！」

キュルケ、タバサ、アンジェリカの次はルイズだ。しかし、ルイズはアンジェリカを乗せると風竜から一歩距離を置いた。

それに嫌な予感を感じたアンジェリカが必死に彼女を呼んだが、ルイズは微笑むだけで風竜に近付こうとしない。

「タバサ、二人をお願い」

「あなたは？」

「あれの足止め」

ルイズの意図を汲み、タバサが風竜に飛び立つよう指示する。

「お姉ちゃん！ いや、離して！」

「ちよ、アンジェ危ないわ！」

どうやって足止めをするつもりなのか、見当もつかない。最悪のイメージばかりが頭に浮かび、アンジェリカは杖を片手にゴーレムに駆けていく姉の背中を涙で歪んだ視界で見ることしかできない。

そんなアンジェリカに、ルイズが少しだけ振り返り、微笑みを向けた。

「っ！」

その微笑みが決定的だったのか、アンジェリカは短く息を吸うと羽交い締めにしてくるキュルケを『見えない腕』で無理やり引き剥がした。同時に、アンジェリカの身体が宙へと浮き、ルイズとゴーレムの間に割って入る。

「アンジェエ!？」

彼女の名を叫んだのは誰か。

「うあああつー!!」

アンジェリカは“宙に浮いたまま”ゴーレムの正面に立ちほだかり、『見えない腕』全てでゴーレムを思いつき殴り付けた。

体当たり気味でのそれは一体どれほどの威力があったのか。鈍重なゴーレムは宙に浮き僅かながらにその巨体を後退させる。

そしてそこは『破壊の杖』の範囲外であり、直ぐ様ルイズを抱えて離脱したアンジェリカを見届け、ゴーレムが体制を立て直す前に才人が『破壊の杖』をゴーレムにお見舞いした。

轟音を立て、崩れて行くゴーレムを背に、爆風で危なげに才人の側に降り立ったアンジェリカが『見えない腕』で掴みあげていたル

イズを地面に降ろし、一瞬の間もなく抱きつく。

「……………バカ、なんであんな危ないことしたの」

アンジェリカはただルイズを強く抱きしめ、僅かに肩を震わすだけだった。ルイズは困ったふうに笑うと、静かに泣くアンジェリカを優しく抱き返す。それに安心して緊張を緩ませたのか、アンジェリカはルイズに凭れるように身体のを抜いた。同時に意識が遠退いていき、アンジェリカはルイズが抱きしめてくる感触と、キュルケとタバサを乗せた風竜の羽ばたく音を耳に、やがて意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2568j/>

紅月の果てに

2010年10月8日12時38分発行